

山椒大夫

森鷗外



越後の春日えちご かすがを経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群れが歩いてゐる。母は三十歳を踰こえたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞はらから二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいます」と言つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引きずるようにして歩いてゐるが、それでも気が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折り折り思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物詣ものまいりにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、笠かさやら杖つえやらかいがいしい出立いでたちをしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、また気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断たえたり続いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日あきびより和よりによく乾いて、しかも粘土がまじつてゐる

ために、よく固まつていて、海のそばのように踝くるぶしを埋めて人を悩ますことはない。

藁葺わらぶききの家が何軒も立ち並んだ一構ははそえが柞ははその林に囲まれて、それに夕日がかつとさしているところに通りかかった。

「まああの美しい紅葉もみじをごらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね」

姉娘が突然弟を顧みて言った。「早くお父うさまのいらつしやるところへ往ゆきたいわね」

「姉えさん。まだなかなか往いかれはしないよ」弟は賢さかしげに答えた。

母が諭すように言った。「そうですね。今まで越して来たよ
うな山をたくさん越して、河や海をお船でたびたび渡らなくて
は往かれないのだよ。毎日精出しておとなしく歩かなくては」
「でも早く往きたいのですもの」と、姉嬢は言った。

一群れはしばらく黙って歩いた。

向うから空桶を担いで来る女がある。塩浜から帰る潮汲み女
である。

それに女中が声をかけた。「もしもし。この辺に旅の宿をする
家はありませんか」

潮汲み女は足を駐めて、主従四人の群れを見渡した。そして
こう言った。「まあ、お気の毒な。あいにくなところで日が暮れ
ますね。この土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありま
せん」

女中が言った。「それは本当ですか。 どうしてそんなに人気じんぎが悪いのでしょうか」

二人の子供は、はずんで来る対話の調子を気にして、潮汲み女のそばへ寄つたので、女中と三人で女を取り巻いた形になつた。

潮汲み女は言った。「いいえ。 信者が多くて人気のいい土地ですが、くにのかみ国守の掟おきてだからしかたがありません。 もうあそこに」と言いさして、女は今来た道を指さした。「もうあそこに見えていますが、あの橋までおいでなされると高札たかふだが立っています。 それにくわしく書いてあるそうですが、近ごろ悪い人買いがこの辺を立ち廻ります。 それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎とがめがあります。 あたり七軒巻添えになるそうです」

「それは困りますね。 子供衆もおいでなざるし、もうそう遠く

まででは行かれませんか。どうかかしようはありますまいか」

「そうですね。わたしの通う塩浜のあるあたりまで、あなた方がおいでなされると、夜になってしまいましたでしょう。どうもそこらでいい所を見つけて、野宿をなさるよりほか、しかたがありません。わたしの思案では、あそこの橋の下にお休みなさるがいいでしょう。岸の石垣にぴったり寄せて、河原に大きい材木がたくさん立ててあります。荒川の上から流かみして来た材木です。昼間はその下で子供が遊んでいます。奥の方には日もささず、暗くなっている所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはこうして毎日通う塩浜の持ち主のところははそにいます。ついそこの柵ははその森の中です。夜になったら、藁わらや薦こもを持って往つてあげましょう」

子供らの母は一人離れて立つて、この話を聞いていたが、こ

のとき潮汲み女のそばに進み寄つて言った。「よい方に出逢であいましたのは、わたしどもの為しあわ合せでございます。そこへ往つて休ましましょう。どうぞ藁や薦をお借り申しとうございます。せめて子供たちにも敷かせたりきせたりいたしとうございます」

潮汲み女は受け合つて、柞の林の方へ帰つて行く。主従四人は橋のある方へ急いだ。

荒川にかけ渡したおうげのはしたもたもと心化橋の袂に一群れは来た。潮汲み女の言つた通りに、新しい高札が立っている。書いてある国守の掟も、女の詞ことばにたがわない。

人買いが立ち廻るなら、その人買いの詮議せんぎをしたらよさそう

なものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷わせるような掟を、国守はなぜ定めたものか。ふつつかな世話の焼きようである。しかし昔の人の目には掟である。子供らの母はただそういう掟のある土地に来合わせた運命なげを歎よしあしくだけで、掟の善悪は思わない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通う道がある。そこから一群れは河原に降りた。なるほど大層な材木が石垣に立てかけてある。一群れは石垣に沿うて材木の下へくぐつてはいった。男の子は面白がつて、先に立つて勇んではいった。

奥深くもぐつてはいると、洞穴ほらあなのようになった所がある。下には大きい材木が横になつていたので、床を張つたようである。

男の子が先に立つて、横になつて居る材木の上に乗つて、一番隅すみへはいつて、「姉えさん、早くおいでなさい」と呼ぶ。

姉娘はおそろるおそろる弟のそばへ往つた。

「まあ、お待ち遊ばせ」と女中が言つて、背に負つていた包みをおろした。そして着換えの衣類を出して、子供を脇わきへ寄らせて、隅のところところに敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右からすがりついた。岩代いわしろの信夫郡しのぶごおりの住家すみかを出て、親子はここまで来るうちに、家の中ではあつても、この材木の蔭より外らしい所に寝たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさほど苦にはしない。

女中の包みから出したのは衣類ばかりではない。用心に持っている食べ物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて言つた。「ここでは焚火たきびをいたすことは出来ません。もし悪い人に見つけられてはならぬからでございます。あの塩浜の持ち主とやらの家まで往つて、お湯をもらつてまいりましょう。そして藁わら

や薦こものことも頼んでまいりましょう」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は楽しげに粗妝おこしじめやら、乾ほした果くだものやらを食べはじめた。

しばらくすると、この材木の蔭へ人のはいつて来る足音がした。「姥竹うばたけかい」と母親が声をかけた。しかし心のうちには、柞ははその森まで往つて来たにしては、あまり早いと疑つた。姥竹というのは女中の名である。

はいつて来たのは四十歳ばかりの男である。骨組みのたくましい、筋肉が一つびとつ肌の上から数えられるほど、脂肪の少ない人で、牙彫げぼりの人形のような顔に笑えみを湛たたえて、手に数珠ずずを持っている。我が家を歩くような、慣れた歩きつきをして、親子のひそんでいるところへ進み寄つた。そして親子の座席にしていく材木の端に腰をかけた。

親子はただ驚いて見ている。仇あたをしそうな様子も見えぬので、恐ろしいとも思わぬのである。

男はこんなことを言う。「わしは山岡大夫という船乗りじゃ。このごろこの土地を人買いが立ち廻るというので、国守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買いをつかまえることは、国守の手に合わぬと見える。気の毒なは旅人じゃ。そこでわしは旅人を救うてやろうと思ひ立つた。さいわいわしが家は街道かいどうを離れているので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしそうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の人を連れて帰つた。見れば子供衆が菓子を食べていなさるが、そんな物は腹もてなしの足しにはならいで、齒さわに障る。わしがところではさしたる饗応もてなしはせぬが、芋粥いもがゆでも進ぜましよう。どうぞ遠慮せずに来て下されい」男は強しいて誘うでもなく、独語ひとりごと

のように言つたのである。

子供の母はつくづく聞いていたが、世間の掟にそむいてまでも人を救おうというありがたい志に感ぜずにはいられなかつた。そこでこう言つた。「承われれば殊勝なお心がけと存じます。貸すなという掟のある宿を借りて、ひよつとやどぬし宿主に難儀をかけようかと、それが気がかりでございしますが、わたくしはともかくも、子供らにぬく温いお粥かゆでも食べさせて、屋根の下に休ませるところが出来ましたら、そのご恩はのちの世までも忘れませう」

山岡大夫はうなずいた。「さてさてよう物のわかるご婦人じゃ。そんならすぐに案内をして進ぜましよう」こう言つて立ちそうにした。

母親は気の毒そうに言つた。「どうぞ少しお待ち下さいませ。わたくしども三人がお世話になるさえ心苦しゅうございますの

に、こんなことを申すのはいかがと存じますが、実は今一人連れがごさいます」

山岡大夫は耳をそばだてた。「連れがおありなさる。それは男おなじか女子か」

「子供たちの世話をさせに連れて出た女中でございます。湯をもらうと申して、街道を三四町あとへ引き返してまいりました。もうほどなく帰つてまいりましょう」

「お女中かな。そんなら待つて進ぜましょう」山岡大夫の落ちて着いた、底の知れぬような顔に、なぜか喜びの影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米山よねやまの背後うしろに隠れていて、

紺青こんじょうのような海の上には薄い靄もやがかかっている。

一群れの客を舟に載せて纜ともづなを解いている船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊った主従四人の旅人である。

応化橋おうげのはしの下で山岡大夫に出逢った母親と子供二人とは、女中

姥竹うばたけが欠け損じた瓶子へいしに湯をもらつて帰るのを待ち受けて、大

夫に連れられて宿を借りに往つた。姥竹は不安らしい顔をしながらついで行つた。大夫は街道を南へはいつた松林の中の草のや家に四人を留めて、芋粥いもがゆをすすめた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。くたびれた子供らをさきへ寝させて、母は宿の主人あるじに身の上のおおよそを、かすかな燈火ともしびのもとで話した。

自分は岩代いわしろのものである。夫が筑紫つくしへ往つて帰らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生まれたときから

守りもをしてくれた女中で、身寄りのないものゆえ、遠い、覺束ともない旅の伴ともをすることになったと話したのである。

さてここまでは来たが、筑紫の果てへ往くことを思えば、まだ家を出たばかりと言つてよい。これから陸おかを行つたものであろうか。または船路ふなじを行つたものであるか。主人あるじは船乗りであつてみれば、定めて遠国のことを知つてゐるだろう。どうぞ教えてもらいたいと、子供らの母が頼んだ。

大夫は知れきつたことを問われたように、少しもためらわずに船路を行くことを勧めた。陸を行けば、じき隣の越中の国に入る界さかいにさえ、親おや不知子しらず不知の難所がある。削り立てたような巖石すその裾すそには荒浪あらなみが打ち寄せる。旅人は横穴にはいつて、波の引くのを待つていて、狭い巖石の下の道を走り抜ける。そのときは親は子を顧みることが出来ず、子も親を顧みることが出来

ない。それは海辺うみべの難所である。また山を越えると、踏まえた石が一つ揺ゆげば、千尋ちひろの谷底に落ちるような、あぶない岨道そわみちもある。西国へ行くまでには、どれほどの難所があるか知れない。それとは違って、船路は安全なものである。たしかな船頭にさえ頼めば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西国まで行くことは出来ぬが、諸国の船頭を知っているから、船に載せて出て、西国へ行く舟に乗り換えさせることが出来る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに言った。夜が明けかかると、大夫は主従四人をせき立てて家を出た。そのとき子供らの母は小さい囊ふくろから金を出して、宿賃を払おうとした。大夫は留めて、宿賃はもらわぬ、しかし金の入れてある大切な囊は預かっておこうと言った。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人あるじに、舟に乗れば舟の主ぬしに預けるものだとい

うのである。

子供らの母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言うことを聴かなくてはならぬような勢いになった。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、ありがたくは思っても、何事によらず言うがままになるほど、大夫を信じてはいない。こういう勢いになつたのは、大夫の詞に人を押しつける強みがあつて、母親はそれに抗^{あらが}うことが出来ぬからである。その抗うことの出来ぬのは、どこか恐ろしいところがあるからである。しかし母親は自分が大夫を恐れているとは思っていない。自分の心がはつきりわかつていない。

母親は余儀ないことをするような心持ちで舟に乗つた。子供らは屈^ないだ海の、青い氈^{かも}を敷いたような面^{おもて}を見て、物珍しさに胸をおどらせて乗つた。ただ姥竹が顔には、きのう橋の下を立

ち去つたときから、今舟に乗るときまで、不安の色が消え失せなかつた。

山岡大夫は纜ともづなを解いた。檣さおで岸を一押し押すと、舟は揺ゆらめきつつ浮び出た。

山岡大夫はしばらく岸に沿うて南へ、越中境えつちゆうざかいの方角へ漕こいで行く。靄もやは見る見る消えて、波が日にかがやく。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗つて、海松みるや荒布あらめを打ち上げているところがあつた。そこに舟が二艘そう止まつている。船頭が大夫を見て呼びかけた。

「どうじゃ。あるか」

大夫は右の手を挙げて、おやゆび 大拇を折つて見せた。そして自分もそこへ舟を舫もやつた。大拇だけ折つたのは、四人あるという相図あいずである。

前からいた船頭の一人は宮崎の三郎といつて、越中宮崎のものである。左の手の拳こぶしを開いて見せた。右の手が貨しろものの相図になるように、左の手は銭の相図になる。これは五貫文につけたのである。

「気張るぞ」と今一人の船頭が言つて、左の臂ひじをつと伸べて、一度拳を開いて見せ、ついで示指ひしやしゆびを豎たてて見せた。この男は佐渡の二郎で六貫文につけたのである。

「横着者奴おうちやくものめ」と宮崎が叫んで立ちかかれば、「出し抜こうとしたのはおぬしじゃ」と佐渡が身構えをする。二艘の舟がかしいで、舫ふなばたが水むちうを答むつた。

大夫は二人の船頭の顔を冷ややかに見較べた。「あわてるな。どっちも空手からてでは還かえさぬ。お客さまがご窮屈きゆうくつでないように、お二人ずつ分けて進ぜる。賃銭はあとでつけた値段の割じゃ」こう言っておいて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人ずつあの舟へお乗りなされ。どれも西国への便船じゃ。舟足というものは、重過ぎては走りが悪い」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手をとつて乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾いくさし縊じかの銭を握らせたのである。

「あの、主人あるじにお預けなされた囊ふくろは」と、姥竹おばたけが主しゆうの袖そでを引くとき、山岡大夫は空舟をつと押し出した。

「わしはこれでお暇いとまをする。たしかかな手からたしかかな手へ渡すまでがわしの役じゃ。ご機嫌ようお越しなされ」

艫ろの音が忙せわしく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかつて行く。

母親は佐渡に言った。「同じ道を漕いで行って、同じ港に着くのでございましょうね」

佐渡と宮崎とは顔を見合わせて、声を立てて笑った。そして佐渡が言った。「乗る舟は弘誓ぐぜいの舟、着くは同じ彼岸かのきしと、蓮華峰れんげふじ寺の和尚おしょうが言うたげな」

二人の船頭はそれきり黙って舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼びかわす親子主従は、ただ遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂おしげに舷ふなばたに手をかけて伸び上がった。「もうしかたがない。これが別れだよ。安寿あんじゆは守本尊の地藏様を大切におし。厨子王ずしおうはお父うさまの下さった護り刀を大切におし。どう

ぞ二人が離れぬように」安寿は姉娘、厨子王は弟の名である。子供はただ「お母あさま、お母あさま」と呼ぶばかりである。舟と舟とは次第に遠ざかる。後ろには餌えを待つ雛ひなのように、二人の子供があいた口が見えていて、もう声は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「もし船頭さん、もしもし」と声をかけていたが、佐渡は構わぬので、とうとう赤松の幹のような脚にすがった。「船頭さん。これはどうしたことでございます。あのお嬢さま、若さまに別れて、生きてどこへ往かれましょう。奥さまも同じことでございます。これから何をたよりにお暮らしなさいましょう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行つて下さいまし。後生でございます」

「うるさい」と佐渡は後ろざまに蹴った。姥竹は舟笥ふなとこに倒れた。髪は乱れて舷にかかった。

姥竹は身を起した。「ええ。これまでじゃ。奥さま、ご免下さいまし」こう言つてまつさかさまに海に飛び込んだ。

「こら」と言つて船頭は臂ひじを差し伸ばしたが、まにあわなかつた。

母親は袿うちぎを脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございますが、お世話になつたお礼に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します」こう言つて舷に手をかけた。

「たわけが」と、佐渡は髪をつかんで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨しろものじゃ」

佐渡の二郎は牽つな紮なでを引き出して、母親をくるくる巻きにして転がした。そして北へ北へと漕いで行つた。

「お母あさまお母あさま」と呼び続けている姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗介いろうくずには聞えても、あの女子おなごには聞えぬ。女子どもは佐渡へ渡つて粟あわの鳥でも逐おわせられることじやろう」

姉の安寿と弟の厨子王とは抱き合つて泣いている。故郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しよにすることだと思つていたのに、今はからずも引き分けられて、二人はどうしていいかわからない。ただ悲しさばかりが胸にあふれて、この別れが自分たちの身の上をどれだけ変らせるか、そのほどさえ弁わきまえられぬのである。

ひる午になつて宮崎は餅もちを出して食つた。そして安寿と厨子王と

にも一つずつくれた。二人は餅を手に持つて食べようともせず、目を見合わせて泣いた。夜は宮崎がかぶせた苦とまの下で、泣きながら寝入った。

こうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登のと、越前えちぜん、若狭わかさの津々浦々を売り歩いたのである。

しかし二人がおさないので、体もか弱く見えるので、なかなか買おうと言うものがない。たまに買い手があつても、値段の相談が調とわのない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つようになつた。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良ゆらの港に来た。ここには石浦というところに大きい邸やしきを構えて、田畑に米麦を植えさせ、山では猟かりをさせ、海では漁すなどりをさせ、蚕飼こがいをさせ、機織はたおりをさせ、金物すえもの、陶物、木の器、何から何まで、それぞれの職人を使つて造

らせる山椒大夫さんしょうだゆうという分限者ぶんげんしやがいて、人なら幾らでも買う。宮崎はこれまでも、よそに買い手のない貨しろものがあると、山椒大夫がところへ持つて来ることになつていた。

港に出張つていた大夫の奴頭やつこがしらは、安寿、厨子王をすぐに七貫文に買った。

「やれやれ、餓鬼がきどもを片づけて身が軽うなつた」と言つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懐ふところに入れた。そして波止場の酒店にはいつた。

一抱えに余る柱を立て並べて造つた大廈おおいえの奥深い広間に一間四方の炉を切らせて、炭火がおこしてある。その向うに茵しとねを三

枚かさ置ねて敷いて、山椒大夫は凡おしまずきにもたれてゐる。左右には二郎、三郎の二人の息子が狢犬こまいぬのように列ならんでゐる。もと大夫には三人の男子があつたが、太郎は十六歳のとき、逃亡を企てて捕えられた奴やつしに、父が手ずから烙印やきいんをするのをじつと見ていて、一言も物を言わずに、ふいと家を出て行くえが知れなくなつた。今から十九年前のことである。

奴頭やつしがしらが安寿、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辞儀をせいと言つた。

二人の子供は奴頭の詞ことばが耳に入らぬらしく、ただ目をみはつて大夫を見ている。今年六十歳になる大夫の、朱を塗つたような顔は、額が広く脰あごが張つて、髪も鬚ひげも銀色に光つてゐる。子供らは恐ろしいよりは不思議がつて、じつとその顔を見ているのである。

大夫は言った。「買うて来た子供はそれか。いつも買う奴と違
うて、何に使うてよいかわからぬ、珍らしい子供じゃというか
ら、わざわざ連れて来させてみれば、色の蒼あおざめた、か細い童わらわ
どもじゃ。何に使うてよいかは、わしにもわからぬ」

そばから三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十に
なっている。「いやお父つきさん。さつきから見れば、辞儀を
せいと言われても辞儀もせぬ。ほかの奴のように名のりもせぬ。
弱々しゆう見えてもしぶとい者どもじゃ。奉公初めは男が柴しば蒨か
り、女が汐しお汲くみときまつている。その通りにさせなされい」
「おっしゃるとおり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭
が言った。

大夫は嘲笑あざわらった。「愚か者と見える。名はわしがつけてやる。
姉はいたつきを垣衣しのぶぐさ、弟は我が名を萱草わすれぐさじゃ。垣衣は浜へ往つ

て、日に三荷がの潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ。弱々しい体に免じて、荷は軽うして取らせる」

三郎が言つた。「過分のいたわりようじゃ。こりや、奴頭。早く連れて下がって道具を渡してやれ」

奴頭は二人の子供を新参小屋に連れて往つて、安寿には桶おけと杓ひきし、厨子王には籠かごと鎌かまを渡した。どちらにも午餉ひるげを入れる櫛か子れいが添えてある。新参小屋はほかの奴婢ぬひの居所とは別になつていたのである。

奴頭が出て行くころには、もうあたりが暗くなつた。この屋いえには燈火あかりもない。

翌日の朝はひどく寒かった。ゆうべは小屋に備えてある衾ふすまがあまりきたないので、厨子王こもが薦こもを探して来て、舟で苦とまをかずいたように、二人でかずいて寝たのである。

きのう奴頭に教えられたように、厨子王は櫛かたいけ子けを持って厨くりやへ餉かたいを受け取りに往った。屋根の上、地にちらばった藁わらの上には霜が降っている。厨は大きい土間で、もう大勢の奴婢ぬひが来て待っている。男と女とは受け取る場所が違うのに、厨子王は姉の自分のともらおうとするので、一度は叱なぐられたが、あすからはめいめいがもらいに来ると誓ちかって、ようよう櫛かたいけ子のほかに、面桶めんづうに入れた饘かたかゆと、木の椀まりに入れた湯との二人前をも受け取った。饘は塩を入れて炊かしいである。

姉と弟とは朝餉あさげを食たべながら、もうこうした身の上になつては、運命のもとに項うなじを屈かがめるよりほかはないと、けなげにも相

談した。そして姉は浜辺へ、弟は山路をさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履^ふんで、見返りがちに左右へ別れた。

厨子王が登る山は由良^{ゆら}が嶽^{たけ}の裾^{すそ}で、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を苜^ある所は、麓^{ふもと}から遠くはない。ところどころ紫色の岩の露^あわれている所を通つて、やや広い平地に出る。そこに雑木が茂つているのである。

厨子王は雑木林の中に立つてあたりを見廻した。しかし柴はどうして苜^あるものかと、しばらくは手を着けかねて、朝日に霜の融^とけかかる、茵^{しとね}のような落ち葉の上に、ぼんやりすわつて時を過した。ようよう気を取り直して、一枝二枝苜^あるうちに、厨子王は指を傷^{いた}めた。そこでまた落ち葉の上にすわつて、山でさえこんな寒い、浜辺に行つた姉さまは、さぞ潮風が寒かろう

と、ひとり涙をこぼしていた。

日がよほど昇ってから、柴を背負つて麓へ降りる、ほかの樵きこりが通りかかつて、「お前も大夫のところの奴か、柴は日に何荷苴ぢるのか」と問うた。

「日に三荷苴るはずの柴を、まだ少しも苴りませぬ」と厨子王は正直に言った。

「日に三荷の柴ならば、午ひるまでに二荷苴るがいい。柴はこうして苴るものじゃ」樵は我が荷をおろして置いて、すぐに一荷苴つてくれた。

厨子王は気を取り直して、ようよう午までに一荷苴り、午からまた一荷苴つた。

浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも汐の汲みようを知らない。心で心

を励まして、ようよう杓しやくをおろすや否や、波が杓を取って行った。

隣で汲んでいる女子おなじが、手早く杓を拾って戻した。そしてこう言った。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みようを教えてくださいよう。右手めでの杓でこう汲んで、左手ゆんでの桶おけでこう受ける」とうとう一荷汲んでくれた。

「ありがとうございます。汲みようが、あなたのお蔭で、わかったようでございます。自分で少し汲んでみましょう」安寿は汐を汲み覚えた。

隣で汲んでいる女子に、無邪気な安寿が気に入った。二人はひるげ午餉ひるげを食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹きょうだいの誓いちかひをした。これは伊勢こはぎの小萩こはぎといつて、二見が浦から買われて来た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言いつけられた三荷の潮も、弟が言いつけられた三荷の柴も、一荷ずつの勧進を受けて、日の暮れまでに首尾よく調つた。ととの

姉は潮を汲み、弟は柴を茹つて、一日一日と暮らして行つた。ひとひひとひ

姉は浜で弟を思い、弟は山で姉を思い、日の暮れを待つて小屋に帰れば、二人は手を取り合つて、筑紫にいる父が恋しい、佐渡にいる母が恋しいと、言つては泣き、泣いては言う。

とかくするうちに十日立つた。そして新参小屋を明けなくて
はならぬときが来た。小屋を明ければ、奴は奴、やつこ婢は婢、はしため婢の組に入るのである。

二人は死んでも別れぬと言つた。奴頭が大夫に訴えた。

大夫は言つた。「たわけた話じゃ。奴は奴の組へ引きずつて往け。婢は婢の組へ引きずつて往け」

奴頭が承つて起とうとしたとき、二郎がかたわらから呼び止めた。そして父に言つた。「おっしやる通りに童どもわらわを引き分けさせてもよろしゅうございますが、童どもは死んでも別れぬと申すそうでございます。愚かなものゆえ、死ぬるかも知れません。苅る柴はわずかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗へらすのは損でございます。わたくしがいいように計らつてやりましょう」

「それもそうか。損になることはわしも嫌いじゃ。どうにでも勝手にしておけ」大夫はこう言つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置

いた。

ある日の暮れに二人の子供は、いつものように父母のことを言っていた。それを二郎が通りかかつて聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴を虐げたり、諍いさかいをしたり、盗みをしたりするのを取り締まっているのである。

二郎は小屋にはいつて二人に言つた。「父母は恋しゅうても佐渡は遠い。筑紫はそれよりまた遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢いたいなら、大きゆうなる日を待つがよい」こう言つて出て行つた。

ほど経てまたある日の暮れに、二人の子供は父母のことを言っていた。それを今度は三郎が通りかかつて聞いた。三郎は寝鳥を取ることが好きで邸のうちの木立ち木立ちを、手に弓矢を持つて見廻るのである。

二人は父母のことを言うたびに、どうしようか、こうしようかと、逢いたさのあまりに、あらゆる手立てを話し合つて、夢のような相談をもする。きょうは姉がこう言つた。「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出来ないというのは、それは当り前のことよ。わたしたちはその出来ないことがしたいのだから。だ
がわたしよく思つてみると、どうしても二人一しょにここを逃げ出しては駄目なの。わたしには構わないで、お前一人で逃げなくては。そしてさきへ筑紫の方へ往つて、お父うさまにお目にかかつて、どうしたらいいか伺うのだね。それから佐渡へお母さまのお迎えに往くがいいわ」三郎が立聞きをしたのは、あ
いにくこの安寿の詞ことばであつた。

三郎は弓矢を持つて、つと小屋のうちにはいつた。

「こら。お主ぬしたちは逃げる談合をしておるな。逃亡の企てをし

たものには烙印やきいんをする。それがこの邸の掟じや。赤うなつた鉄は熱いぞよ。」

二人の子供は真まつ蒼さおになつた。安寿は三郎が前に進み出て言つた。「あれは謏うそでございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれましよう。あまり親に逢いたいので、あんなことを申しました。こないだも弟と一しよに、鳥になつて飛んで往こうと申したこともございます。出放題でございます」

厨子王は言つた。「姉さんの言う通りです。いつでも二人で今のような、出来ないことばかし言つて、父母の恋しいのを紛まぎらしているのです」

三郎は二人の顔を見較べて、しばらくの間黙つていた。「ふん。謏なら謏でもいい。お主たちが一しよにおつて、なんの話をするということをおれがたしかに聞いておいたぞ」こう言つ

て三郎は出て行つた。

その晩は二人が気味悪く思いながら寝た。それからどれだけ寝たかわからない。二人はふと物音を聞きつけて目をさました。今の小屋に来てからは、燈火ともしびを置くことが許されている。そのかすかな明りで見れば、枕もとに三郎が立っている。三郎は、つと寄つて、両手で二人の手をつかまえる。そして引き立てて戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、二人は目見えのときに通つた、広い馬道めどうを引かれて行く。階はしを三段登る。廊ほそどのを通る。廻り廻めぐつてさきの日に見た広間にはいる。そこには大勢の人が黙つて並んでいる。三郎は二人を炭火の真つ赤におこつた炉の前まで引きずつて出る。二人は小屋で引き立てられたときから、ただ「ご免なさいご免なさい」と言っていたが、三郎は黙つて引きずつて行くので、しまいには二人も黙つてしまった。炉の向

い側には茵しとね三枚をかさ重ねて敷いて、山椒大夫がすわっている。大夫の赤顔が、座の右左に焚たいてある炬火たてあかしを照り反して、燃えるようである。三郎は炭火の中から、赤く焼けている火筋ひばしを抜き出す。それを手に持って、しばらく見ている。初め透き通るように赤くなっていた鉄が、次第に黒ずんで来る。そこで三郎は安寿を引き寄せて、火筋を顔に当てようとする。厨子王はその肘ひじにからみつく。三郎はそれを蹴倒けたおして右の膝ひざに敷く。とうとう火筋を安寿の額に十文字に当てる。安寿の悲鳴が一座の沈黙を破つて響き渡る。三郎は安寿を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、その額にも火筋を十文字に当てる。新たに響く厨子王の泣き声が、ややかすかになった姉の声に交じる。三郎は火筋を棄てて、初め二人をこの広間へ連れて来たときのように、また二人の手をつかまえる。そして一座を見渡したのち、広い

母屋おもやを廻まわつて、二人を三段の階はしの所まで引き出し、凍こおつた土の上に衝つき落す。二人の子供は創きずの痛みと心の恐れとに氣を失いそうになるのを、ようよう堪たえ忍しのんで、どこをどう歩あいたともなく、三の木戸の小家こやに帰る。臥所ふしどの上に倒れた二人は、しばらく死骸しがいのように動かうがずにいたが、たちまち厨子王くしおうが「姉あねえさん、早くお地藏様ぢざうさまを」と叫こゑんだ。安寿はすぐに起き直ただつて、肌はだの守袋まもりぶくろを取り出した。わななく手に紐ひもを解ひいて、袋から出した仏像を枕まくらもとに据すえた。二人は右左にぬかずいた。そのとき齒はをくいしばつてもこらえられぬ額の痛みが、搔かき消すように失なせた。掌てのひらで額かぶを撫なでてみれば、創きずは痕あともなくなつた。はつと思つて、二人は目をさました。

二人の子供は起き直ただつて夢の話をした。同じ夢を同じときに見たのである。安寿は守本尊を取り出して、夢で据すえたと同じ

ように、枕もとに据えた。二人はそれを伏し拝んで、かすかな燈火ともしびの明りにすかして、地藏尊の額を見た。白毫びやくごうの右左に、鑿たがねで彫つたような十文字の疵きずがあざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞きせられて、その晩恐ろしい夢を見たときから、安寿の様子がひどく変つて来た。顔には引き締まつたような表情があつて、眉まゆの根には皺しわが寄り、目ははるかに遠いところを見つめている。そして物を言わない。日の暮れに浜から帰ると、これまでは弟の山から帰るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんなときにも詞少ことほすくなことほすくにしている。厨子王が心配して、「姉えきさんどうしたのです」と言う、「どうも

しないの、大丈夫よ」と言つて、わざとらしく笑う。

安寿の前と變つたのはただこれだけで、言うことが間違つてもおらず、することも平生へいぜいの通りである。しかし厨子王は互いに慰めもし、慰められもした一人の姉が、變つた様子をするのを見て、際限なくつらく思う心を、誰に打ち明けて話すことも出来ない。二人の子供の境界きょうがいは、前より一層寂しくなつたのである。

雪が降つたり歇やんだりして、年が暮れかかった。奴やつこも婢はしためも外うしろに出る為事しごとを止めて、家の中で働くことになつた。安寿は糸を紡つむぐ。厨子王は藁わらを擣うつ。藁わらを擣うつのは修行はいらぬが、糸を紡ぐのはむずかしい。それを夜になると伊勢の小萩が来て、手伝つたり教えたりする。安寿は弟に対する様子が變つたばかりでなく、小萩に対しても詞少ことすくなになつて、ややもすると不愛想

をする。しかし小萩は機嫌を損せず、いたわるようにしてつきあっている。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。しかしこの年のはじめは何の晴れがましいこともなく、また族うからの女子おなごたちは奥深く住んでいて、出入りすることがまれなので、賑にぎわしいこともない。ただ上かみも下しもも酒を飲んで、奴の小屋には諍いさかいが起るだけである。常は諍いさかいをする、きびしく罰せられるのに、こういうときは奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしていることがある。どうかすると、殺されたものがあつても構わぬのである。

寂しい三の木戸の小屋へは、折り折り小萩が遊びに来た。婢の小屋の賑にぎわしさを持つて来たかと思うように、小萩が話している間は、陰気な小屋も春めいて、このごろ様子の変っている

安寿の顔にさえ、めつたに見えぬ微笑みの影が浮ぶ。

三日立つと、また家の中の為事が始まった。安寿は糸を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。もう夜になつて小萩が来ても、手伝うにおよばぬほど、安寿は紡錘を廻すことに慣れた。様子は変つていても、こんな静かな、同じことを繰り返すような為事をするには差支えなく、また為事がかえつて一向きになつた心を散らし、落ち着きを与えるらしく見えた。姉と前のように話をする事の出来ぬ厨子王は、紡いでいる姉に、小萩がいて物を言つてくれるのが、何よりも心強く思われた。

水が温み、草が萌えるころになつた。あすからは外の為事が

始まるという日に、二郎が邸を見廻るついでに、三の木戸の小屋に来た。「どうじゃな。あす為事に出られるかな。大勢の人のうちには病気でおるものもある。奴頭の話聞いたばかりではわからぬから、きょうは小屋小屋を皆見て廻つたのじゃ」

藁を擣っていた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、このごろの様子にも似ず、安寿が糸を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それについてお願いがございます。わたくしは弟と同じ所で為事がいたしとうございます。どうか一しよに山へやって下さるようにな、お取り計らいなすつて下さいまし」蒼ざめた顔に紅くれないがさして、目がかがやいている。

厨子王は姉の様子が二度目に変つたらしく見えるのに驚き、また自分になんの相談もせずについて、突然柴刈りに往きたいと言いふうのを訝いぶかしがって、ただ目をみはって姉をまもっている。

二郎は物を言わずに、安寿の様子をじつと見ている。安寿は「ほかにない、ただ一つのお願いでございます、どうぞ山へおやりなすつて」と繰り返して言っている。

しばらくして二郎は口を開いた。「この邸では奴婢ぬひのなにがしになんの為事をさせるといふことは、重いことにしてあつて、父がみずからきめる。しかし垣衣しのぶぎぬ、お前の願いはよくよく思い込んでのことと見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるようにしてやる。安心しているがいい。まあ、二人のおさないものが無事に冬を過してよかつた」こう言つて小屋を出た。

厨子王は杵きねを置いて姉のそばに寄つた。「姉えさん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ来て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し抜けに頼んだのです。なぜわたしに相談

しません」

姉の顔は喜びにかがやいている。「ほんにそうお思いのはもつともだが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、頼もうとは思つていなかつたの。ふいと思いついたのだもの」

「そうですか。変ですなあ」厨子王は珍らしい物を見るように姉の顔を眺めている。

奴頭が籠と鎌とを持ってはいつて来た。「垣衣しのぶぎぬさん。お前に汐汲みをよさせて、柴を刈りにやるのだそうで、わしは道具を持って来た。代りに桶と杓すくひをもらつて往いこう」

「これはどうもお手数てかずでございました」安寿は身軽に立つて、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ帰りそうにはしない。顔には一種の苦笑にがわらいのような表情が現われている。この男は山椒大夫

一家いっけのもののの言いつけを、神の託宣を聴くように聴く。そこで随分情けない、苛酷かこくなことをもためらわずにする。しかし生得しょうとく、人の悶もたえ苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事がおだやかに運んで、そんなことを見ずに済めば、その方が勝手である。今の苦笑いのような表情は人に難儀をかけずには済まぬとあきらめて、何か言ったり、したりするときに、この男の顔に現われるのである。

奴頭は安寿に向いて言った。「さて今一つ用事があるて。実はお前こしらさんを柴苅りにやることは、二郎様が大夫様に申し上げて拵こしらえなされたのじゃ。するとその座に三郎様がおられて、そんなら垣衣おおわらわを大童にして山へやれとおっしゃった。大夫様は、よい思いつきじゃとお笑いなされた。そこでわしはお前さんの髪をもううて往かねばならぬ」

そばで聞いている厨子王は、この詞を胸を刺されるような思
いをして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安寿の顔からは喜びの色が消えなかつた。「ほんにそ
うじゃ。柴苧りに往くからは、わたしも男じゃ。どうぞこの鎌
で切つて下さいまし」安寿は奴頭の前に項うなじを伸ばした。

光沢つやのある、長い安寿の髪が、鋭い鎌の一搔ひとかきにさつくり切
れた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿さして、手を
引き合つて木戸を出た。山椒大夫のところに来てから、二人一
しよに歩くのはこれがはじめである。

厨子王は姉の心を忤はかりかねて、寂しいような、悲しいような思いに胸が一ぱいになつてゐる。きのうも奴頭の帰つたあとで、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまった。

山の麓に来たとき、厨子王はこらえかねて言った。「姉えさん。わたしはこうして久しぶりで一しよに歩くのだから、嬉しからなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはこうして手を引いていながら、あなたの方へ向いて、その禿かぶろになつたお頭つむりを見ることが出来ません。姉えさん。あなたはわたしに隠して、何か考へていますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです」

安寿はけさも毫光びょうこうのさすような喜びを額にたたえて、大きい目をかがやかしている。しかし弟の詞には答へない。ただ引き

合っている手に力を入れただけである。

山に登ろうとする所に沼がある。汀には去年見たときのように、枯れ葦が縦横に乱れているが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つつ、うねった道を登って行くのである。

ちようど岩の面に朝日が一面にさしている。安寿は畳なり合つた岩の、風化した間に根をおろして、小さい堇の咲いているのを見つけた。そしてそれを指さして厨子王に見せて言った。「ごらん。もう春になるのね」

厨子王は黙つてうなずいた。姉は胸に秘密を蓄え、弟は憂えばかりを抱いているので、とかく受け応えが出来ずに、話は水が砂に沁み込むようにとぎれてしまう。

去年柴を茹つた木立ちのほとりに来たので、厨子王は足を駐めた。「ねえさん。ここらで茹るのです」

「まあ、もつと高い所へ登つてみましようね」安寿は先に立つてずんずん登つて行く。厨子王は訝いぶかりながらついて行く。しばらくして雑木林よりはよほど高い、外山とやまの頂とも言ふべき所に来た。

安寿はそこに立つて、南の方をじつと見ている。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔つた川向いに、こんもりと茂つた木立ちの中から、塔たの尖さきの見える中山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。「わたしがあんな前まへから考えごとをしていて、お前ともいつものように話をしないのを、変だと思つていたでしょうね。もうきょうは柴なんぞは茹らなくてもいいから、わたしの言うことをよ

くお聞き。小萩は伊勢から売られて来たので、故郷からこの土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむずかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすいことではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あさまとご一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐ろしい人ばかり出逢ったが、人の運が開けるものなら、よい人に出逢わぬにも限りません。お前はこれから思いきつて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登っておくれ。神仏のお導きで、よい人にさえ出逢ったら、筑紫へお下りになったお父うさまのお身の上も知れよう。佐渡へお母あさまのお迎えに往くことも出来よう。籠や鎌は棄てておいて、櫓か子れいだけ持つて往くのだよ」

厨子王は黙って聞いていたが、涙が頬ほおを伝って流れて来た。

「そして、姉えさん、あなたはとうしようとういのです」

「わたしのことは構わないで、お前一人ですることを、わたしと一しよにするつもりでしておくれ。お父うさまにもお目にかかり、お母あさまをも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに来ておくれ」

「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせましょう」厨子王が心には烙印やきいんをせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それはいじめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せませす。金で買った婢はしためをあの人たちは殺しはしません。多分お前がいなくなったら、わたしを二人前働かせようとするでしょう。

お前の教えてくれた木立ちの所で、わたしは柴をたくさん苅ります。六荷までは苅れないでも、四荷でも五荷でも苅りましょう。さあ、あそこまで降りて行って、籠や鎌をあそこに置いて、

お前を麓へ送つて上げよう」こう言つて安寿は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思い定めかねて、ぼんやりしてついて降る。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑つかれたように、聡さとく賢さかしくなつてゐるので、厨子王は姉の詞にそむくことが出来ぬのである。

木立ちの所まで降りて、二人は籠と鎌とを落ち葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こんど逢うまでお前に預けます。この地藏様をわたしだと思つて、護り刀と一しよにして、大事に持つていておくれ」

「でも姉えさんにお守がなくては」

「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢うお前にお守を預けま

す。晩にお前が帰らないと、きつと討手うってがかかります。お前がいくら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追いつかれるにきまつています。さつき見た川かみての上手を和江わえという所まで往つて、首尾よく人に見つけられずに、向う河岸へ越してしまえば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えていたお寺にはいつて隠しておもらい。しばらくあそこに隠れていて、討手が帰つて来たあとで、寺を逃げておいで」

「でもお寺の坊さんが隠しておいてくれるでしょうか」

「さあ、それが運うんだめ験しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれましょう」

「そうですね。姉えさんのきょうおつしやることは、まるで神様か仏様がおつしやるようです。わたしは考えをきめました。なんでも姉えさんのおつしやる通りにします」

「おう、よく聴いておくれだ。坊さんはよい人で、きつとお前を隠してくれませう」

「そうです。わたしにもそうらしく思われて来ました。逃げて都へも往かれます。お父うさまやお母あさまにも逢われます。姉えさんのお迎えにも来られます」厨子王の目が姉と同じようにかがやいて来た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くおいで」

二人は急いで山を降りた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持ちが、暗示のように弟に移つて行つたかと思われる。

泉の湧く所へ来た。姉は櫛かえいけ子こに添かえてある木の椀まりを出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出かどでを祝うお酒だよ」こう言つて一口飲んで弟にさした。

弟は椀まりを飲み干した。「そんなら姉えさん、ご機嫌よう。きつ

と人に見つからずに、中山まで参ります」

厨子王は十歩ばかり残つていた坂道を、一走りに駆け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安寿は泉の畔ほとりに立つて、並木の松に隠れてはまた現われる後ろ影を小さくなるまで見送つた。そして日はようやく午ひるに近づくの、山に登ろうともしない。幸いにきょうはこの方角の山で木を樵こる人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安寿を見とがめるものもなかつた。

のちに同胞はらからを捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端はたで、小さい藁履わらぐつを一足そく拾つた。それは安寿の履くつであつた。

中山の国分寺こくぶじの三門に、松明たいまつの火影が乱れて、大勢の人が籠こみ入つて来る。先に立つたのは、白柄しらつかの薙刀なぎなたを手挟たはさんだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大声に言つた。「これへ参つたのは、石浦の山椒大夫が族うからのものじゃ。大夫が使う奴やつこの一人が、この山に逃げ込んだのを、たしかに認めたものがある。隠れ場は寺内よりほかにはない。すぐにここへ出してもらおう」ついて来た大勢が、「さあ、出してもらおう、出してもらおう」と叫んだ。本堂の前から門の外まで、広い石畳が続いている。その石の上には、今手に手に松明を持った、三郎が手のものが押し合っている。また石畳の両側には、境内に住んでいる限りの僧俗が、

ほとんど一人も残らず簇むらつている。これは討手の群れが門外で騒いだとき、内陣からも、庫裡くらからも、何事が起つたかと、怪しんで出て来たのである。

初め討手が門外から門をあけいと叫んだとき、あけて入れたら、乱暴をせられはすまいかと心配して、あけまいとした僧侶が多かった。それを住持曇猛どんみん律師りつしがあけさせた。しかし今三郎が大声で、逃げた奴を出せと言うのに、本堂は戸を閉じたまま、しばらくの間ひっそりとしている。

三郎は足踏みをして、同じことを二三度繰り返した。手のものうちから「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑い声が交じる。

ようようのことで本堂の戸が静かにあいた。曇猛律師が自分であけたのである。律師は偏衫へんさん一つ身にまとって、なんの威儀

をも繕つくろわず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階はしの上に立った。丈たけの高い巖がんじょう畳な体と、眉のまだ黒い廉張かどばった顔とが、揺ゆらめく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師はしずかに口を開いた。騒がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで黙ったので、声は隅々まで聞えた。「逃げた下人げにんを捜しに來られたのじゃな。当山では住持のわしに言わずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは当山にいぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟けんげきを執とつて、多人数押し寄せて參られ、三門を開けと言われた。さては国に大乱でも起つたか、公おおやけはんぎやくにんの叛逆人でも出来たかと思つて、三門をあけさせた。それになんじや。御身おんみが家の下人の詮議せんぎか。当山は勅願の寺院で、三門には勅額をかけ、七重の塔には宸翰しんかん金字の経文おきが蔵おさめてある。ここで狼藉ろうげきを働はたらかされると、国守くにのかみは檢校けんぎょうの責めを問われるのじゃ。また総本

山東大寺に訴えたら、都からどのような御沙汰ごさたがあるかも知れぬ。そこをよう思うてみて、早う引き取られたがよかろう。悪いことは言わぬ。お身たちのためじゃ」こう言つて律師はしづかに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨にらんで齒咬はみをした。しかし戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもはただ風に木の葉のざわつくようにささやきかわしている。

このとき大声で叫ぶものがあつた。「その逃げたというのは十二三の小わっぱじゃろう。それならわしが知つておる」

三郎は驚いて声の主ぬしを見た。父の山椒大夫に見まごうような親爺おやじで、この寺の鐘楼守しゅろうもりである。親爺は詞つを續いで言つた。「そのわっぱはな、わしが午ひるごろ鐘楼から見ておると、築泥ついでいの外を通つて南へ急いだ。かよわい代りには身が軽い。もう大分の道

を行つたじやろ」

「それじゃ。半日に童の行く道は知れたものじゃ。続け」と言つて三郎は取つて返した。

松明たいまつの行列が寺の門を出て、築泥ついでじの外を南へ行くのを、鐘楼守は鐘楼から見て、大声で笑つた。近い木立ちの中で、ようよう落ち着いて寝ようとした鴉からすが二三羽また驚いて飛び立つた。

あくる日に国分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安寿じゆすいの入水いりみづのことを聞いて来た。南の方へ往つたものは、三郎の率いた討手が田辺まで往つて引き返したことを聞いて来た。

中二日おいて、曇猛律師が田辺の方へ向いて寺を出た。盥たらいほどある鉄の受糧器を持って、腕の太さの錫杖しやくじょうを衝ついている。あ
とからは頭を剃りこくつて三衣えを着た厨子王ずしおうがついて行く。

二人は真昼に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊った。山城の
朱雀野しゅじやくのに来て、律師は権現堂に休んで、厨子王に別れた。「守本
尊を大切にして往け。父母の消息はきつと知れる」と言い聞か
せて、律師は踵くびすを旋めぐらした。亡くなった姉と同じことを言う坊様
だと、厨子王は思った。

都に上った厨子王は、僧形そうぎようになつていたので、東山の清水寺きよみずでら
に泊った。

籠堂こもりどうに寝て、あくる朝目がさめると、直衣のうしに烏帽子えぼしを着て指貫さしぬき
をはいた老人が、枕もとに立っていて言った。「お前は誰の子
じゃ。何か大切な物を持っているなら、どうぞおれに見せてく

れい。おれは娘の病気の平癒へいゆを祈るために、ゆうべここに参籠さんろうした。すると夢にお告げがあつた。左の格子こうしに寝ている童わらわがよい守本尊を持つている。それを借りて拝ませいということじゃ。けさ左の格子に来てみれば、お前がいる。どうぞおれに身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。おれは関白師実もろざねじゃ」

厨子王は言つた。「わたくしは陸奥掾正氏むつつのじようまさうじというものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安楽寺へ往つたきり、帰らぬそうでございます。母はその年に生まれたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡しのぶごおりに住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買いに取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ売られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つ

ている守本尊はこの地藏様でございます」こう言つて守本尊を出して見せた。

師実は仏像を手に取つて、まず額に当てるようにして礼をした。それから面背めんぱいを打ち返し打ち返し、丁寧に見て言つた。「これはかねて聞きおよんだ、尊い放光王地藏菩薩ほうこうおうじざうぼさつの金像こんざうじゃ。百済国くだらのくにから渡つたのを、高見王が持仏にしておいでなされた。これを持ち伝えておるからは、お前の家柄まぎに紛まぎれはない。仙洞せんとうがまだ御位みくらいにおらせられた永保えいほうの初めに、国守いきやくの違格いぎやくに連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏たいらのまさうじが嫡子ちやくしに相違あるまい。もし還俗げんぞくの望みがあるなら、追つては受領ずりようの御沙汰もあろう。まず当分はおれの家の客にする。おれと一しよやかたに館やかたへ来い」

関白師実の娘といつたのは、仙洞にかしずいている養女で、
実は妻の姪である。この後は久しい間病気でいられたのに、厨
子王の守本尊を借りて拜むと、すぐに拭うように本復せられた。
師実は厨子王に還俗させて、自分で冠を加えた。同時に正氏
が謫所へ、赦免状を持たせて、安否を問いに使いをやつた。し
かしこの使いが往つたとき、正氏はもう死んでいた。元服して
正道と名のつている厨子王は、身のやつれるほど歎いた。

その年の秋の除目に正道は丹後の国守にせられた。これは遙授
の官で、任国には自分で往かずに、掾をおいて治めさせるので
ある。しかし国守は最初の政として、丹後一国で人の売り買
いを禁じた。そこで山椒大夫もことごとく奴婢を解放して、給
料を払うことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のよ

うに思ったが、このときから農作も工匠たくみの業も前に増して盛んになつて、一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律師そうずは僧都にせられ、国守の姉をいたわつた小萩は故郷へ還かえされた。安寿が亡きあとはねんごろに弔とむらわれ、また入水した沼の畔ほとりには尼寺が立つことになつた。

正道は任国のためにこれだけのことをしておいて、特に仮寧けにようを申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の国府こふは雑太さわたという所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で国中を調べてもらつたが、母の行くえは容易に知れなかつた。

ある日正道は思案にくれながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道にかかつた。空はよく晴れて日があかあかと照つている。正道は

心のうちに、「どうしてお母あさまの行くえが知れないのだろう、もし役人なんぞに任せて調べてさせて、自分が捜し歩かぬのを神仏が憎んで逢わせて下さらないのではあるまいか」などと思いつながら歩いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側のまばらな生垣いけがきのうちが、土をたたき固めた広場になつていて、その上に一面に蓆むしろが敷いてある。蓆には刈り取つた粟あわの穂が干してある。その真ん中に、檻ぼろ褌ついでを着た女がすわつて、手に長い竿さおを持つて、雀の来て啄ついでむのを逐おつてゐる。女は何やら歌のような調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、この女に心が牽ひかれて、立ち止まつてのぞいた。女の乱れた髪は塵ちりに塗まみれている。顔を見れば盲めしいである。正道はひどく哀れに思った。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。それと同時に正

道は瘡病おこりやみのように身うちが震ふるつて、目には涙が湧いて来た。女はこういう詞を繰り返してつぶやいていたのである。

安寿恋しや、ほうやれほ。

厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥も生しょうあるものなれば、

疾とう疾とう逃げよ、逐おわずとも。

正道はうつとりとなつて、この詞に聞き惚ほれた。そのうち臟腑ぞうぶが煮え返るようになって、獣けものめいた叫びが口から出ようとするのを、齒を食いしばつてこらえた。たちまち正道は縛られた縄が解けたように垣のうちへ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、女の前に俯伏うつぶした。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏したときに、それを額に押し当てていた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに来たのを知った。

そしていつもの詞を唱えやめて、見えぬ目でじつと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤うるおいが出た。女は目があいた。

「厨子王」という叫びが女の口から出た。二人はぴったり抱き合った。

大正四年一月

山椒大夫

底本：「日本の文学 3 森鷗外 (二)」中央公論社
1972 (昭和 47) 年 10 月 20 日発行

入力：真先芳秋

校正：野口英司

1998 年 7 月 21 日公開

2006 年 5 月 16 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。